二本松藩随一の刀工 古山陸奥介弘元（1778～1843）

“武士の魂”といわれる日本刀。旧二本松藩では、数多くの刀工が知られています。その中でも、藩随一と称され、他藩からの作刀注文が殺到した刀匠が、古山陸奥介弘元でした。

安永７年(1778年)、二本松藩の鉄砲鍛冶古山久四郎の末子として出生。古山家は代々鍛冶屋で、父の代に鉄砲鍛冶を本業としています。

弘元は、20歳のころ、仙台に出て刀匠十一代国包の門人として、修業を始めました。

文化２年(1805年)江戸に上り、当時、天下一の刀匠と称された水心子正秀の門人となり、厳しい鍛錬を重ねます。ほかにも、同郷の安積艮斎を介して昌平學塾長で儒学者の佐藤一斎について勉強に励み、蘭学者の司馬江漢に師事して西洋科学の研鑽を積み、焼き刃・湯加減や刀剣発錆の理論を会得し、鍛刀技法に活用しました。

また、文化８年(1811年)に『刀を作る記』、文政３年(1820年)に『刀剣見利書』を著すなどし、江戸でその名が知れわたるようになりました。

さらに、自作刀を試すために武士道にも心がけたらしく、文武に精通する刀工に成長したといわれています。

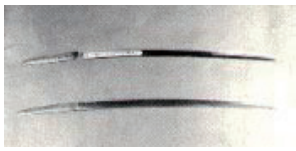
文政４年(1821年)、免許皆伝の「剣工秘伝志」が伝授されました。弘元の鍛刀技術の評価が諸藩の大名にも届き、作刀依頼が相次いだといいます。

当時、“守”や“介”等の叙位を拝領するためには莫大な金と献上物が必要で、弘元も叙位を拝領するために、献上用の刀剣百振と大金を準備して、京都へ上り、京都に滞在すること40日余り、ようやく朝延より口宣(口頭による勅命)されたのでした。

弘元の名声を聞いて、諸藩より召し抱えの申し出が相次いだため、時の藩主丹羽長富は帰藩を命じました。それ以降、藩お抱え刀工として藩士用の作刀に専念。藩主の意を汲んで他藩からの注文には応えなかったといいます。

刀銘には、「二本松住古山宗次」「陸奥介弘元」「古山陸奥介弘元」「古山陸奥介藤原朝臣弘元」等があります。天保14年(1843年)５月27日死去、享年66歳、市内亀谷光現寺に眠っています。

「陸奥介」拝領(口宣)
古山博氏所蔵



弘元作刀

二本松ふるさと人物史
二本松市ウェブサイト

二本松警察署からのお知らせ

犯罪発生状況(令和５年１月～10月)

		二本松地区	安達地区	岩代地区	東和地区	不明等	合計	前年対比
侵入盗	空き巣		1	2			3	2
	出店荒し	2	3				5	5
	その他	7	5	1(1)			13(1)	5
非侵入盗	万引き	15(2)	15(1)				30(3)	16
	車上ねらい			1			1	－1
	その他	26(4)	2	8(1)	5(1)		41(6)	20
自転車盗		4(1)	9				13(1)	11
器物損壊		3	2(1)				5(1)	－2
住居侵入		1			1		2	1
その他		25(2)	6	1		2	34(2)	13
合計		83(9)	43(2)	13(2)	6(1)	2	147(14)	70
前年対比		38	25	8	－1		70	

※()は10月の発生件数

地域で子供の見守りを!!

日常生活の中、気軽にできる「ながら見守り」活動の協力をお願いします。